

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2006年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			文学 研究科		比較文明学専攻	
指導教員	所属・職名			氏 名			
	文学研究科比較文明学専攻・教授			北山晴一 印			
自然・人文の別	自然 ・ <input checked="" type="radio"/> 人文			個人・共同の別	<input checked="" type="radio"/> 個人 ・ 共同 名		
研究課題名	「破滅」をめぐるサブカルチャー史 －若者文化における「核」と「破壊」の表象－						
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年			氏 名			
	文学研究科 比較文明学専攻 博士後期課程 5年			片上平二郎 印			
研究組織	在籍研究科・専攻・学年			氏 名			
研究期間	2006		年度				
研究経費	200		千円				

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、日本サブカルチャー内部での「核」と「破壊」という主題の扱われ方の変遷を追うことで、戦後の日本社会を考察していくものである。この考察を通じて、「戦争」や「科学」といったものに対する社会的感覚、「戦後日本社会」というものの自己イメージに対する分析が可能になると考えている。「核」とは一方では「戦争」の象徴であり、他方では「科学技術」の象徴でもある。「戦争経験」の受け取られ方の変遷、「科学技術」というものに対する社会的評価の変遷は、「文明観」を問うことでもある。消費的傾向の強い「サブカルチャー」作品とは、社会的欲望や社会的無意識を強く反映する側面を持ったものだ。それゆえに、日本社会が持ってきた「核」や「科学」というものに対するねじれた社会感覚が強く描き出されている可能性を持つ。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[サブカルチャー] [社会的欲望] [核]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

2006 年度中には、好井裕明「ファンタジー化する原水爆そして原子力イメージ ゴジラ映画・特撮映画というテキスト」(桜井厚編『戦後世相の経験史』所収)小田切博『戦争はいかに「マンガ」を変えるか—アメリカンコミックスの変貌』、福間良明『「反戦」のメディア史 戦後日本における世論と輿論の拮抗』、吉村和真・福間良明編『「はだしのゲン」がいた風景—マンガ・戦争・記憶』といった書籍の刊行や、雑誌『新現実第4号』における大塚英志や上野俊哉らの編集による「ジャパニメーションからファシズムへ」が特集されたことなど、マンガやテレビ番組といったサブカルチャー的表象と戦争の関係を問いにあげる研究が非常に多く刊行され、研究状況が大きく進展することとなった。これらの諸研究は、本研究と問題関心が大きく重なるものであると言える。類似した問題関心を持つ研究が多数登場してきているという現在の学問的動向は、一方では、本研究が現代の日本においてある一定のアクチュアリティを持っていることの証明であるということもできるだろうが、他方では、それらの研究の蓄積との関連の中で本研究が独自の意味を持たなければならなくなったという研究上の困難が現れてきたことも意味している。

そこで、まず、考えるべき問題として、戦争とサブカルチャーという主題が、なぜ、現在大きな問題として浮上してきたのか、という問いが存在している。その問いに対する答えの1つとして考えられるのは、9. 11「テロ」からイラク「戦争」という世界情勢の変化の中で、現在の日本で「戦争」というものに対する関心が大きく上昇しているということであるだろう。「戦争」と密接に結びついてしまった現在の社会状況の中で、メディアや文化が表象してきた「戦争」や「核」の「暴力」に対する反省的、批判的視線が要請されはじめていると言える。

もう1つの理由として、「戦後」という時代を再考しなければならないという感覚が強まってきているということが考えられる。「憲法第9条」改訂の可能性が語られるなど、「戦後」という時代が持っていた「戦争」と「平和」に関する感覚は、現在、徐々に消え去ろうとしている。上述のように、「戦争」がきわめて現実的な問題となってしまっている現在の社会状況の中で、「戦後」という時代の中で、どのように「戦争」が描かれ、そして、どのように「平和」が語られていたのかということを確認することは重要な意味を持っている。「戦後」における「平和」が忘れ去られようとしている状況の中で、今一度、「戦後」という時代と「現在」の、連続性と断絶を分析する作業の1つとして、これまで描かれてきたサブカルチャーにおける戦争の表象を時代意識とともに考察することは存在している。

このような「現在」の「日本」という文脈の中で持つ学問的意味を、問題関心が重なる多数の研究との関連を意識しながら、反省的に捉えなおすことから、本研究は再出発することになったと言える。本研究は、「戦争」という「暴力」がきわめてアクチュアルなものになった現在の状況の中で、「戦後」という時代の中に存在していた、過去の「戦争」の「記憶」と、同時代の「戦争」や「核」への「感覚」を、サブカルチャー表象を通じて、取り出すものであると言える。そして、その中に存在していた「暴力」への「欲望」を批判的に検証しながらも、同時に、潜在的に存在していたであろう「平和」への視座を現在に有効なかたちで再評価したいと考える。

現在、大枠においては、以下のようなかたちで、日本のサブカルチャーにおける、過去の「戦争」や「核」の表象に関する感覚の時代的変遷に関するモデルを構想している。このモデルの下では、それらが、「恐怖」される側面が強くなる時期と、「欲望」される側面が強くなる時期が、交互に存在することを強調して描くことによって、表象の変遷の構造を見通しやすくしようとしている。

1954年の映画『ゴジラ』が、核実験で誕生し放射能を口から吐き出す怪獣であったように、この時期においては、「戦争」の記憶や「核」への恐怖心が、都市の破壊として描かれていた。もしくは、1960年の『第三次世界大戦』や1961年の『世界大戦争』のように冷戦下に起きるかもしれない新たな戦争の可能性が描写された映画が存在して

研究成果の概要 つづき

いる。

しかし、日本の科学技術力への自己評価が増し、「科学」というものが「明るい未来」を象徴するものとしてイメージされるに従い、60年代後半以降、徐々に「核」への恐怖心は「原子力」の可能性へと転化されていくことになる。そのため、あからさまに「核」の恐怖を描いた作品は減少し、また、ときには、「原子力兵器」が単なる武器の1つとして描かれることになる(この変化については、『ゴジラ』から『ウルトラマン』に至る変化を描いた前出の好井論文などを参照)。

ただし、高度成長期がある程度、進展したがゆえに生じた「公害」などの問題と相まって、再度、未来に対する不安感は社会的に強くなりだす。1973年の五島勉の書物『ノストラダムスの大予言』に代表される「終末論」ブームが70年代中盤に一気に広がることになる。映画においても、同じ73年の『日本沈没』や74年の『ノストラダムスの大予言』の映画化に代表される、無数の近未来における「破滅」の恐怖を描いた作品があらわれることになる。これは、映画が社会の持つ感覚を強く映し出すメディアであることとともに、テレビの普及・発展において斜陽状態が続く映画業界が、独自の方向性として大作志向を持ちはじめの中で、その志向性と「破滅」というテーマとの相性が良かったということもあるだろう(この時期の映画産業の、「大作」と「ポルノ」への分化の中で、映画が「戦争」を論じてきた語り口がどのように分化していくのか、ということについては、今後、重点的に研究していくことを考えている)。なお、一般的には「人類の進歩と調和」というテーマで科学と未来の可能性を論じていたとイメージされやすい70年の万博において、太陽の塔内部で流されていた映像がきわめて「終末論」的な感覚のものであったことは、科学に対する期待と不安が入れ替わりつつある、端境的な時期を象徴するものであり、興味深い。

この「終末論」的な表現文化を受け手育った後続世代たちは、「破壊」とサブカルチャーの感覚に対して新たな感受性を持ち始めるに至る。現在ある「大人たち」の世界が、「核戦争」で壊れ、自分たちの新たな時代がその後到来するというイメージが描かれはじめ。1983年連載開始のマンガ『北斗の拳』や82年連載開始の『AKIRA』などがこの例に当たるだろう。80年代前半のこれらの作品では、「核戦争」はすでに起こってしまったものとして描かれ、それ以降の少年たちのアナーキーな感覚の世界が語られる。

この70年代後半の「終末論」ブーム、80年代前半の「核戦争後の世界」イメージという2つのサブカルチャー内イメージを経験し世代は、あくまでサブカルチャーの表象を経由した範囲ではあるが、「核」による「破滅」に対して、独特の恐怖感と独特の期待感を持っていたと言える。この世代内感覚に対して、1986年のチェルノブイリ原発事故は大きな衝撃を与えることになる。そして、これまでの反核運動とは異なった、消費社会的な感覚と結びついた「広瀬隆ブーム」が起きることになる。「核」に対する強い危機感と、同時に、それを持つことが「センスエリート」であるかのように語ることで起きた、この時期の「広瀬隆」減少の持つ特殊な意味合いはさらに考察されるべきだろう。

この後、世界的には、東西冷戦終結による一時的な「核戦争」表象のリアリティの低下から、911「テロ」以降の新たな「戦争」イメージの登場という流れ、日本国内では、サブカルチャー内で流通してきた「破滅」イメージを実際に引き起こそうとしたようにも見える「オウム事件」、それとは別のかたちで都市の「破壊」が現実生じた阪神淡路大震災が起きた95年から「クール」な核論議などという議論が語られるようになった現在までの流れの中で、サブカルチャーにおける「核」や「破滅」の表象は、新たな段階を迎えているように思われる。

ただし、上記のような大まかな流れの図式化は一方で過度の単純化とも言える議論であり、このような大きな流れを描く一方で、「昭和40年代」における、「ウルトラマン」シリーズに代表される円谷プロ特撮テレビ番組内の、「戦争」や「都市破壊」をめぐる微妙な変化などの個別的な分析も行っている。

※ この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

- ① なし
- ② なし
- ③ なし
- ④

博士論文「差別を取り巻く社会的力線の分析と差別者の構成」

学会報告 第79回日本社会学会年次大会 一般報告「アドルノの伝統概念」
第54回関東社会学会年次大会 一般報告「再帰的近代と否定弁証法」